

サッカー中継の視聴空間における政治学：韓国のオーディエンスを事例に

呉, 炫錫

嘉泉大学：主席研究員：社会学

<https://doi.org/10.15017/1498206>

出版情報：総合文化学論輯. 1, pp.19-31, 2014-11-01. 総合文化学研究所
バージョン：
権利関係：

サッカー中継の視聴空間における政治学 －韓国オーディエンスを事例に－

呉 炫錫（オ ヒョンソク）

1. はじめに

本稿は国家対抗戦のサッカー中継をみているオーディエンスに関するものである。周知のように、国家対抗戦のサッカー中継はメディアを通じ、国家/国民に関する表象をいろいろな形で伝えている。それを視聴するオーディエンスは、自分が置かれている状況の中で国家/国民に関する表象を消費しながら、ナショナル・アイデンティティを構築していくだろう。では、このような視聴行為は、オーディエンスがどのような条件の中で実践行為を行っているのか。本稿は、こうした点に注目して、実際のオーディエンスの視聴行為を中心に実証的検討を行ったものである。

特に、本稿ではサッカー中継のオーディエンスが視聴を行う空間でどのような権力関係が構築されているのかを検討し、そこから現れるサッカー中継のヘゲモニーについて考察してみる。

2. 日常のナショナリズム

本稿は、メディアを通じて伝達されるナショナルな表象に対して、オーディエンスがどのような実践行為を行っているのか、それからそういう視聴空間でどのような力関係が作動しているのかを検討したものである。このような本稿の方向性は、国家対抗戦サッカー中継を視聴する行為がナショナル・アイデンティティを構築していくプロセスであるという立場からの議論である。

では、われわれは日常生活の中で、どのようにナショナル・アイデンティティを構築していくのか¹。まず、ナショナリズムというのは、周知のように、近代国民国家

¹ 本稿はナショナル・アイデンティティをナショナリズムという概念から派生したものとみなす。その理由は、われわれが一般的に使っているナショナリズムという言葉はあまりにも広範な意味で使われているからだ。本稿はこのような用語の混乱を避けるためにナショナル・アイデンティティという用語を使って、個々人がメディアから生み出される国家/国民の表象に対するアイデンティファイの過程を考察するために、ナショナル・アイデンティティという言葉を使って議論する。

の成立以後、各々の国では多様な方法でナショナリズムを生産・再生産させてきた。このような役割を遂行したのは、様々な国家イデオロギー装置である。

しかし、現代社会でのナショナリズムは強制的あるいは強圧的に高揚させるものであるとは言い難い。すなわち、現代社会でのナショナリズムは、無意識的、あるいは常識的な意識の枠組みで日常生活の中に溶け込んでいるものである。本稿ではこのようなナショナリズムをBilligが言う「日常のナショナリズム」という概念に基づいて考察する²。われわれは日常の生活で国家という想像の共同体をあまり認識することがなく、生活している。おそらく、それは一つの国でみんなが同じ国民として自然に生活しているからであるだろう。ところが、われわれが日常の生活で自国を認識するきっかけはいつだろう。それは日常の生活で他者/他国との境界が明らかになる場合である。例えば、外国へ旅行に行く際、旅券を提示することによって他国と自国との境界線を感じ、自国を認識することもあり、学校教育で自国と他国との関係を勉強することによって自国を認識することもある。また、国内の日常生活で外国人と接触することによって自国民としての認識を確認することもありうる。このようなプロセスは、自己と他者という二項対立の関係で自分のアイデンティティを確認することである。

本稿では、このような他者との境界が生じる際、自国に対するイメージが浮上し、その瞬間自国に対するアイデンティファイを行う過程を「日常のナショナリズムの実践行為」と呼ぶ。

ところで、このような他者との境界が最も明らかになる場³がスポーツの国家対抗戦である。スポーツの国家対抗戦は他国との競争関係によって国民を興奮させ、その過程を通じ、自国に対するアイデンティファイを行うようになると言える。すなわち、このような過程は、日常生活の中であまり感じることがない国家という想像の共同体が他者との境界を通じて浮上し、自国に対するアイデンティファイが行われる過程であると言える。このような過程はまさに「日常のナショナリズム」の実践課程であり、こうした行為はナショナル・アイデンティティの構築の過程であるだろう。

Billigも、「日常のナショナリズム」の影響を最も強く示す領域の一つがスポーツ

² Billig, M. *Banal Nationalism*, Sage publication, 1996, p. 77.

³ 本稿で場という表現はBourdieu (1991) が言う場の概念を借用した。Bourdieu の場は社会空間での下位概念として行為者との間で権力と威信を追求する闘争の空間を意味する。つまり、本稿での場が持つ意味は単純にオーディエンスが国家/国民に関する言説をそのまま受動的に解釈することではなく、テレビ視聴空間という一つの場でダイナミックであり、象徴的闘争が行われる空間として理解しようと思う。

の報道だと強調する⁴。スポーツ報道は、それに接することが国民の義務とみなされることはないし、あくまで娯楽のために提供される「快樂のテキスト」である。しかし、そこでは「自己」と「他者」という線引きが自明視され、自己犠牲の精神が無批判に称揚される。犠牲を払って奉仕する対象こそ、「我が国」である。このようなBilligの「日常のナショナリズム」の概念は、本稿の観点と非常に類似したものだと考える。

3. 韓国のサッカーの社会的含意

ここで、韓国のサッカーが持っている社会的含意を簡単に検討してみる⁵。戦後、韓国のスポーツに関する言説は、大きく二つの他者が存在しており、それを通じてナショナリズムを生産・再生産してきたというものである。一つは北朝鮮を他者として扱う反共主義であり、もう一つは日本に対する反日主義である。

まず、反共主義に関してであるが、周知のように朝鮮戦争後、韓国は北朝鮮と休戦状態に入る。当時の韓国の政権は、アメリカに対する依存度が高く、世界の情勢は米ソ冷戦システムにおかれていたので、韓国は北朝鮮との関係が対立的であった。このような政治的な背景によって、韓国のサッカーは反共主義を喚起させ、国民にナショナリズムを植え付ける有用な手段であった。

このような社会的な背景によって、当時のサッカー代表の国際試合は、北朝鮮に対する必勝が最優先されており、敵としての徹底的な扱いを行ったのである。古典的な社会学者Simmelが指摘したとおりに、このような敵対関係は、集団内部の分裂を避け、全体の結合を維持し、共同生活を円満化させる機能を果たしたのである⁶。

一方、戦後韓国の政権は、日本という敵を作り出し、警戒心を高めながら、国民の統合に寄与する思想として反日主義を利用した。韓国人にとって国家が不在であった日本植民地時代におけるナショナリズムというものは、国家の空白を埋めてくれるものであり、神話でもあった。戦後韓国のナショナリズムに関する言説は、上述したように反共ナショナリズムと結合して、反共主義者たちの政治的立場を強化させ、独裁政権を維持させる論理として利用された。また、日本植民地支配に対する歴史的コ

⁴ Billig, 1996, pp.122-125.

⁵ 韓国のサッカーに関する議論は、筆者の「韓国のサッカーとナショナリズム」(2004)という論文を中心にまとめた。

⁶ Simmel, G. *Soziologie: Untersuchungen*, 1923. = 堀喜望・居安正訳、『闘争の社会学』、法律文化社、1966年。

ンプレックスが存在する中で、抵抗ナショナリズムを通じ、帝国主義に抵抗する「われわれ」という抵抗主体を作り出した。

ところが、このような日本に対する必勝コンプレックスは、サッカーに限られた話ではない。サッカーのみではなく、各種の日本対抗戦の試合で、対日本必勝主義がいつも現れてきたのである。つまり、韓国では、歴史的なトラウマとしての日本コンプレックスが、サッカーを通じて「対日本必勝コンプレックス」として現われているのである。韓国におけるサッカー日韓戦と関連する言説をみると、韓国の対日本コンプレックスが持っているイデオロギーは明らかに見える。

上述した「反共主義」と「反日主義」の共通点は、民族的危機を通じ、国家の重要性を国民に認識させ、国家意識が高揚したと考えられる。こうした社会的背景は、当然スポーツという場に投影され、イデオロギー的機能を遂行したのである。

しかし、このような「反共主義」と「反日主義」がナショナルな言説に節合し、サッカー観戦という場に表れるということは、1990年代後半以後大きな変化を迎えるようになる。その原因として考えられるのは、冷戦時代の終焉という時代的な変化もあるが、若い世代を中心とする新たな文化的趣向の形成であるとも考えられる。

このような社会的変化の中で、韓国では1990年代から新たな文化的趣向が登場し、その過程の一環として、韓国人のサッカー観戦にも大きな影響を与えたと思う。こうした兆候を明確に現したのは、2002年ワールドカップの際の、いわゆる「赤い悪魔」という応援文化現象である。2002年の「赤い悪魔」現象に関する分析には、その参加のプロセスは自発的であって、新愛国主義であるという新たな観点が存在する。「赤い悪魔」現象に対する「新愛国主義」という解釈は、建国以来このように国民が一つになって、熱狂したことがないし、このような機会が民族的プライドを高揚し、新たな共同体意識を確認する劇的なきっかけになり、民族と国家の発展の新たな発展の可能性をみたという観点である。このような観点の特徴は、既存の韓国のサッカーが持っているイデオロギー的機能ではなく、「赤い悪魔」現象に対して肯定的に理解されているということである。

つまり、「赤い悪魔」現象は、街頭の多くの人々とテレビ中継を視聴した韓国人が国民としての呼びかけに受動的な反応をしたとは言えないし、単純にイデオロギー的機能として分析することもできない。したがって、このようなサッカー応援に熱狂する人々は、HardtとNegriが述べた「意思疎通を好み欲望する能動的な大衆（多数：multitude）⁷」の概念に近いのではないかと考える。すなわち、このような「大

⁷ Hardt, M and Negri, A. EMPIRE, Harvard University, 2001 . = 윤수종 역『제국』이학사,2001년. (韓国語、筆者訳)

衆」は家庭、学校、職場などの既存の領域から脱出し、各自の多様性、異質性と構成的潜在力を備えたまま作られたリゾームの性格を持っていると考える。

しかし、「赤い悪魔」の能動性の側面を過度に強調すると、この現象の危険な面を看過する可能性もある。つまり、国家・資本・メディアなどがどのように作動しているかに関する考察が必要である。華麗なメディア・イベントを通じて、国家と国民の同意を創出し、ヘゲモニーを構築していくプロセスを考慮しなければならない。また、そこから派生する国家のイメージに関する新たな生成・再生産のプロセスも考察する必要があるだろう。すなわち、国家代表のサッカー観戦は、ナショナル・アイデンティティの再構築に参加するという認識も必要があるだろう。

このように韓国のサッカーが持っている社会的含意を考慮した上で、本稿ではサッカーを視聴する空間に関する論議を行う。国家対抗戦サッカー中継を視聴することは、ナショナル・アイデンティティの構築の過程であることは間違いない。だとすると、このような視聴の空間でどのような力関係が作動しているのか。本稿ではこのような点に注目して議論を行う。

4. インタビュー調査の結果

(1) インタビュー調査の概観

本稿では、国家代表サッカー中継のオーディエンスに対する調査を行うために、2008年2月24日から2008年12月23日まで約10ヶ月にかけて、韓国の5人の男性と3人の女性を対象にインタビューを行った。韓国のオーディエンスは、多様な社会的背景を持っており、職業も様々である。特に、本稿は国家代表のサッカー中継を家庭の中で家族全員が集まってみる傾向性が強いという点に注目した。そこで、家族が集まってサッカー中継をみている4人のオーディエンスに対しては、家族の中で一人に対する参考的なインタビューも行った。本稿はインタビューを行う際、彼らが日常生活の文化的な空間の中で、国家代表のサッカー中継をどのように意味化、再構造化させているのかを調べた。

(表1) オーディエンスの社会的属性

区分	性別	年齢 ⁸	職業	学歴	家族構成
K1	男	60	会社員	高卒	妻、長男、長女

⁸ 年齢は2008年12月23日の基準である。

K2	女	41	大学教員	大学院	夫
K3	男	40	自営業	高卒	妻、長女、次女
K4	男	40	会社員	短大卒	妻、長女
K5	男	35	語学スクール講師	大学院	未婚
K6	女	33	専業主婦	短大卒	夫、長女
K7	女	28	会社員	大学院	夫
K8	男	20	大学生	大学在学中	未婚

(2) 家父長制の再生産

ここでは、テレビ視聴空間でどのような権力関係が動いているのかに関して議論する。調査の結果、韓国のテレビ視聴空間は家父長中心の視聴が行われている。すなわち、家庭の中でテレビチャンネル権は、男性が持っており、たとえ男女共同に持っている家庭でも番組の選択は男性が行使する。

例えばK3、K6の場合、男性がチャンネル権を持っており、K1とK4は、チャンネル権を共有しているが、番組の選択は夫が持っている。

「*ところで、テレビのチャンネル権は旦那さんですか

: はい。私は諦めてあげます。(K3の妻のインタビューより)」

「*テレビのチャンネル権はどなたが握っていますか。

: チャンネル権はほぼ夫です。(K6のインタビューより)」

また、K1とK4は、テレビのチャンネル権は共有していると答えたが、実際番組の選択は夫が行使している。

「*家でチャンネル権は誰が握っていますか。

: そんなことはありません。主導権なんかありません。でも主に夫にまかせます。

私は見なくてもいいから。(K4の妻のインタビューより)」

つまり、K4は、チャンネル権の問題ではなく、テレビ視聴をめぐる権力図式が完全に男性中心に行われているのだ。それからK4の妻は、サッカーをみるようになった状況を次のように語っている。

「*結婚前、実家ではテレビでスポーツはみましたか。

: いいえ、ほとんどみませんでした。

*では、幼い頃、家族とワールドカップやオリンピックのような試合を集まっ

てみましたか。

：いや、ないですね。田舎だったし。

*好きな番組は何ですか。

：映画。夫がみないと映画をみます。

*映画はいつみますか。

：一人でいる時。……

*ワールドカップの中継は関心を持っていますか。

：はい。徹夜もしながらみますよ。

*結婚前は、そんな経験ないですか。

：はい。

*結婚してからみるようになりましたか。

：はい、そうですね。（K4の妻のインタビューより）」

すなわち、K4の場合、番組に関するヘゲモニーは完全に夫に握られおり、妻がサッカー中継をみるようになったことも夫の影響が強い。また、実際の視聴空間で行われている役割も夫中心である。このような結果は、ほかの家庭もほぼ同じ状況であった。

さらに、このようなテレビ視聴の条件は、主婦が夫の影響を受け、サッカーをみるようになる傾向性までみえてくる。

「*好きな番組は何ですか。

：特に集中してみません。面白いドラマがあればみます。

*一人でみますか、それとも旦那さんと？

：一緒にみます。……

*結婚前、サッカーはみましたか。

：いや、あまり。

*ご両親は？

：お父さんが好きでした。サッカー協会で何とかの役もしました。

*それでもみなかったんですか。

：はい。みませんでした。……

*だったら、今は旦那さんがみているから、みますか。

：はい。

*正確に言って、サッカーに関心がなかったが、旦那さんの影響でみるように

なりましたか。

：はい、そうです。50%以上はそれが原因です。（K3の妻のインタビューより）」

一方、テレビがあるリビングという空間は、男性は休む場所であることに比べ、女性は家事をしながら、あるいは子育てをしながらテレビを視聴する空間であった。このような区別は、テレビ視聴空間が家父長制的権力構造が再生産する役割を果たしていると言わざるを得ない。このような結果は、おそらく家族の中での権力関係が男性中心であり、それがテレビ視聴という空間で再現したと考える。

したがって、韓国のテレビ視聴空間は、家父長制度の再生産の場であり、主婦たちがサッカー中継の実践的場に参加することは、家父長制度の再生産に参加すると言えらるだろう。

(3) 家庭におけるサッカー中継のヘゲモニー

では、上述した家父長中心のテレビ視聴空間で、サッカー中継はどのように位置づけられているのか。ここで一つ強調しておきたいことは、韓国のサッカー中継のオーディエンスはサッカー競技に対する熱烈な願望によって国家対抗戦サッカーを視聴することではなく、「家族の絆」が根強く意識され、そこから視聴行為が行われるということだ。

例えばK2は、現在子供がいないが、幼い頃実家での生活では、サッカー試合やオリンピック試合などを家族が集まってみた経験が多いタイプである。それで、彼女に将来子供が生まれる場合を予想して、インタビューを行った。

「*もし、将来子供ができれば、テレビに対する制限はしますか。

：多分すると思います。なぜなら、番組によって、扇情的な場面もあるし、だからそれはちょっと考えていますね。

*そのような状況で国家代表のサッカー試合は、一緒にみる予定ですか。

：それはいいと思いますよ。扇情的でもないし、荒いものでもないから。それは人々が努力して、努力することをみることじゃないですか。いいと思いますよ。……

*むかし実家でオリンピックやワールドカップなどをみたのが、いいイメージとして残っていますか。

：そうですね。なぜなら、家族と一緒にみるから、一緒に共有できる時間、一緒に見られるということ……（K2のインタビューより）」

本稿のインタビュー調査でわかったことだが、子供がいる家庭では全部テレビ視聴に関する制約を行っていた。テレビ視聴の時間的制限や暴力的な番組などに関する制限を行っている。しかし、このような家庭での共通的な特徴は国家対抗戦サッカー視聴を子供達に積極的に奨励しており、できれば家族みんなが集まって視聴する傾向があった。

例えば、K3の場合、近所に両親が住んでいるが、サッカー中継をみるために、わざわざ家族を連れて両親の家まで行って視聴するタイプである。

「*（笑）子供たちと一緒にみますか。

：私が全部召集します。これみようと。……

*今子供にテレビに対する制限はしますか。

：少しはします。夜遅く10時、11時になったら、寝るように。

*扇情的なものや暴力的なものは？

：それはみせません。

*そして、（サッカーを）家族が集まってみることは大事な時間として考えていますか。

：あー、そうだ。それは結構感じますよね。

*家族愛を感じる時間として？

：私はわざわざ親と一緒に集まってみますよ。

*わざわざみていますか。お祖父さんも？

：そうですね。なぜなら、同じものをみながら同じことを考えることは、団結にもなるし、顔もみるために集まるし、そういうことになるからね。

（K3のインタビューより）」

K3は、家族が集まって国家代表のサッカー中継をみる行為が「家族の絆」を強化させる場であり、そのため、積極的な家族視聴を指向しているのである。この問題に関しては、K3の妻もほぼ一致している。

「*では、家族が集まってワールドカップや国家代表のサッカー試合をみることに対しては制限とか制約はありませんか。

：ありません。……

*それをみるのが教育的に？

：とてもいいと思いますよ。家族同士でそういうことをするのは。応援するの がいいと思います。

*では、それが家族愛を感じる空間として多くの部分を占めていると思えますか。

：はい、はい、そうです。（K3の妻のインタビューより）」

続いてK4もほぼ同じ状況である。

「*娘に対するテレビの制限はしますか。

：成人物などはみせないし、暴力的なものとかも。……

*ではサッカーをみせるのは、いいと思えますか。

：そうですね。みたらね。でもあいつがあまり好きじゃないみたい。女だし。

*でも三人でみるのが楽しいと思えますか。

：そうですね。関心もあるし、そしてワールドカップの本番だったらもっとみえますね。今は予選だからそうだけ。 （K4のインタビューより）」

「*では韓国のサッカー試合は、どのような教育的効果があると思えますか。

：いや、みてもいいと思えますよ。

*いい番組だと思えますか。

：はい。

*では、一緒にみることが家族愛を感じるという期待もありますか。

：あー、それが大きいですよ。私は。……できれば三人でみます。そうすることが私はとてもいいと思えます。スポーツ競技は別として、一緒にすごすことが。 （K4の妻のインタビューより）」

このような状況は、インタビューに応じたオーディエンス全員にみられる 共通した特徴であった。

したがって、韓国のオーディエンスは、家庭の中でサッカー中継をみることに對して、「家族の絆」を強化させる場としての認識が非常に根強いと言える。

言い換えれば、国家対抗戦サッカー中継の視聴空間は、オーディエンスがサッカーに関する興味によって視聴することではなく、「家族の絆」の強化あるいはこだわりの場として機能しているのである。今回インタビュー調査に応じたオーディエンスは、サッカーのみではなく、オリンピックのような国家対抗戦のスポーツ中継にも家族全

員が集まってみる傾向が非常に強い。このような結果は、ヨーロッパのサッカーファンとは大きな違いが見えてくるのである。つまり、ヨーロッパの場合、プロサッカーチームであれ、国家代表チームであれ、サッカー競技という種目に集中し、視聴する。しかし、韓国の場合、サッカーであれ、オリンピックであれ、国家対抗戦だったら、家族が集まって視聴する傾向が強い。このようなプロセスは、スポーツに対する本質的興味ではなく、自国と他国との二項対立的競技を視聴することによって、日常生活の中に溶け込んでいる「日常のナショナリズム」に対する実践的行為につながり、ナショナル・アイデンティティの構築である。なぜならば、このような視聴行為は、結局のところ、国家対抗戦のサッカー中継を視聴することによって、国家/国民という表象を消費するプロセスであり、このようなプロセスを通じ、自国に対するナショナル・アイデンティティを構築していくからである。

5. 結びにかえて

本稿は、サッカー中継の視聴空間をめぐって、どのような力関係が作動しているか、それからそこでオーディエンスがどのような視聴行為を行っているのかについて考察したものである。

戦後、韓国はスポーツを通じ、国民にナショナリズムを高揚させてきた。特に、サッカーを通じ、他者/他国との二項対立的構造を伝達させ、自国に対するナショナル・アイデンティティを強化させてきた。本稿は、このような韓国の社会的背景に注目して、実際に家庭の中でサッカー中継がどのような権力関係を生み出し、どのようにヘゲモニーを持っているかを考察した。

本稿の調査で明らかになったのは、まず家庭の中での視聴空間は、家父長制の再生産の場として機能していることである。また、サッカー中継の視聴空間におけるオーディエンスの視聴行為は単純にサッカーに対する快楽を消費することではなく、「家族の絆」を強化する空間として機能している。すなわち、国家対抗戦サッカー中継が家庭の中でヘゲモニーを持つのは、単純にスポーツに対する興味ではなく、家族という共同体の強化ということである。でも、このようなプロセスは、サッカー視聴を通じ、他者との境界線を確認することによって、ナショナル・アイデンティティを構築しており、このようなプロセスは、まさに「日常のナショナリズム」の実践行為であり、ナショナル・アイデンティティの構築過程なのである。

<参考文献>

- ・ 吳炫錫、「カルチュラル・スタディーズにおけるテレビ・オーディエンス研究に関する一考察」『比較思想論輯』、比較思想学会福岡支部15号、2008年9月、pp. 9-20.
——、「韓国のサッカーとナショナリズム」『社会分析』、日本社会分析学会、31号、2004年、pp.113-127.
- ・ 細見和之、『アイデンティティ/他者性』、岩波書店、2001年.
- ・ 毛利嘉孝、「ワールドカップとナショナリズム 韓国と日本の言論の比較から」『W杯サッカーの熱狂と遺産 2002年日韓ワールドカップを巡って』、世界思想社、2003年、pp.120-141.
- ・ ファン・ソンビン、「W杯と日本の自画像、そして韓国という他者」『マス・コミュニケーション研究』、日本マスコミュニケーション学会、2003年、62号、pp. 23-39.
- ・ Anderson, B. *Imagined Communities*, London: Verso Editions, 1991. = 白石さや・白石隆 訳、『想像の共同体』NTT出版、1997年.
- ・ Billig, M. *Banal Nationalism*, Sage Publication, 1996.
- ・ Bourdieu, P. *Questions de sociologie*, Éditions de Minuit, 1980. = 田原音和 監訳、『社会学の社会学』、藤原書店、1991.
- ・ Hardt, M and Negri, A. *EMPIRE*, Harvard University, 2001. = 윤수중 역 『제국』 이학사, 2001년.
- ・ Lever, J. *Soccer Madness*, University of Chicago Press, 1995. = 亀山佳明、西山けい子訳、『サッカー狂の社会学』、世界思想社、1996.
- ・ Morley, D. *Family Television: Cultural Power and Domestic Leisure*, London: Comedia, 1980.
- ・ Simmel, G. *Soziologie: Untersuchungen*, 1923. = 堀喜望・居安正訳、『闘争の社会学』、法律文化社、1966年.

※本稿は、筆者が2009年9月に取得した学位の学位請求論文の一部をまとめたものである。

[Political perspective in the watching space broadcasting soccer game -
A case study on Korean audience -]

[呉 炫錫(オ ヒョンソク、 Oh Hyunsuk) : 嘉泉(Gachon)大学首席研究員、社会学]